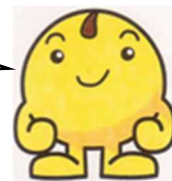


長雨による排水対策や、中耕・培土を徹底しましょう。



1 排水対策の徹底と、干ばつ対策の実施について

(1) 長雨による排水対策と浸水後の対策

- まとまった降雨等による湿害回避のため、中耕・培土後は、地表水が1日以内に排水されるように、畝間の溝を周囲の溝と連結しましょう。また、排水がスムーズになるよう、溝が土塊でふさがれていないかなど点検・整備を行いましょう。
- 大雨のあと、ほ場に水が停滞している場合は、河川の安全を確認した上で、排水路・ほ場内排水溝の点検・整備を行い、速やかに排水させましょう。
- 長雨により中耕・培土が実施できなかったほ場は、降雨の合間に土壌の乾燥状態を確認して中耕・培土を行い、排水性の向上と大豆の生育向上に取り組みましょう。
- 中耕・培土の晩限は開花始め(主茎の1花が開花した時期)までですが、生育量が小さい場合は開花期(5割の株が開花始めに達した時期)までに実施することで生育量の増加が期待できます。
- ほ場の畦の上まで浸水し2日以上経過したほ場では、中耕・培土時に窒素成分で2～3 kg/10aの追肥をすることで生育の回復が見込めます。

(2) 梅雨明け後の干ばつ対策

- 暗渠が設置されているほ場では、まとまった降雨で湿害になる場合や地下水位が高く湿害が発生しやすい場合を除き、暗渠を閉め、土壌水分が低下しすぎないように管理しましょう。
- また、団地の代表的なほ場に地下水位を目視で確認できる縦穴を設置し、ほ場の地下水位を観察しましょう。地下水位が60～80 cm以下に下がる場合は、かん水等を行いましょう。



縦穴施工の様子

地下水位目視縦穴

(3) かん水のポイント

- 実施時期：開花期以降の1ヶ月間（7月下旬～8月下旬）
- かん水の実施目安：下表の環境条件とほ場条件にすべて当てはまる場合

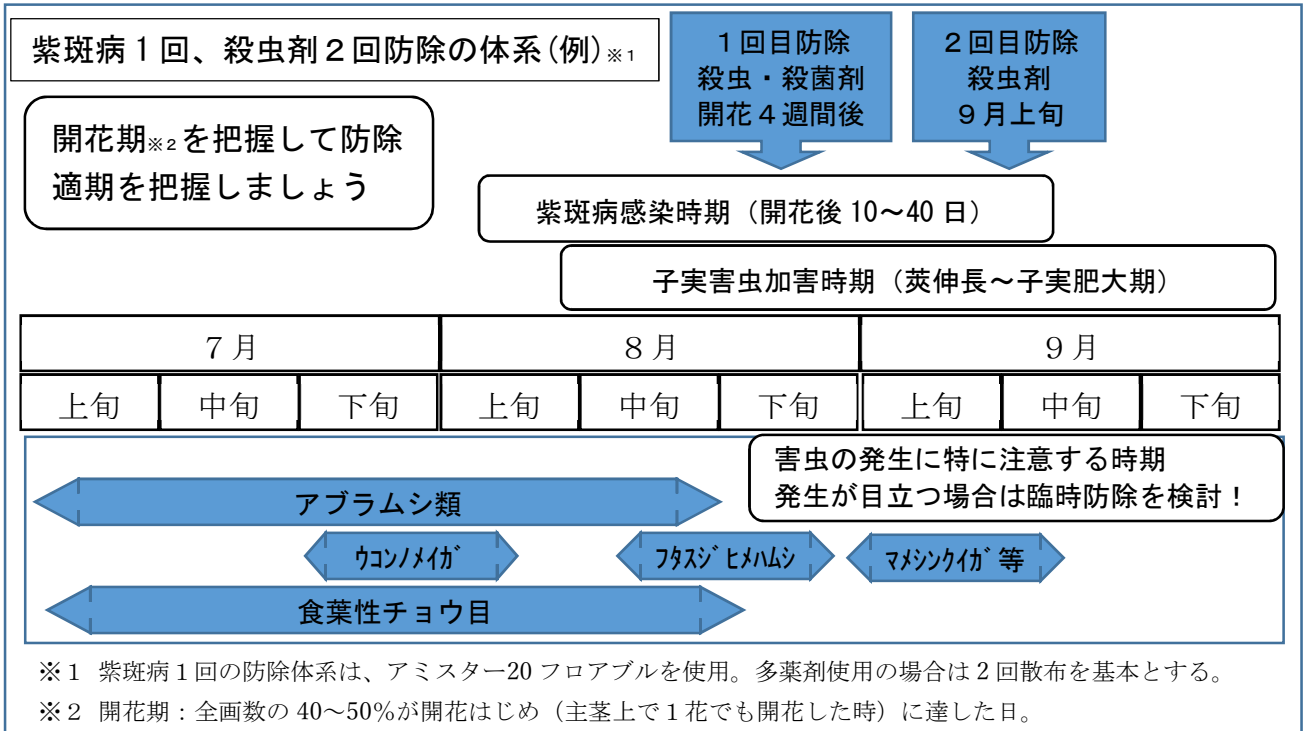
かん水が必要な環境条件	かん水できるほ場条件
①株の一番上の葉が日中半分以上直立。 ②条間の土が白く乾いている。 ③上記①②の条件下でさらに晴天が3日以上続く見込み。	①周囲明渠等の排水対策がきちんと施工されている。 ②排水が良好であり、速やかに地表水が排除できる。

- 注意点
 - ・排水口・暗渠栓を閉じて、ほ場全体に水が行き渡るまでかん水を行い、ほ場全体に水が回ったら速やかに排水しましょう。
 - ・1回当たりの水量は地下かんがいでは50～60 mm、地表かんがいはこれよりやや多くかん水しましょう。
 - ・大きい区画では一度に1筆のほ場をかん水すると、水口側で湿害を起こすことがあるため、数日かけてかん水しましょう。

2 病虫害防除

主要病虫害の体系防除

ほ場段階で対象となる主要な病虫害は、紫斑病、ウコンノメイガ、フタスジヒメハムシ及びマメシクイガ。これらを対象に体系防除を行きましょう。



商品名	対象病虫害	希釈倍数・使用量	使用方法	使用時期	本剤の使用回数	散布液量	アゾキシストロビンを含む農薬の総使用回数
アミスター20 フロアブル	紫斑病	2000~3000 倍	散布	収穫 7 日前まで	2 回以内	100 ~ 300 ㍓/10a	2 回以内
		16~24 倍	無人航空機による散布			800 ミリリットル/10a	

【農薬使用の注意事項】

- ①「農薬使用者」の責任を理解し、「使用者」が責任を持って使用してください。
- ②「農薬のラベル」に記載された「適用作物」「使用量・濃度」「使用時期」「総使用回数」を確認し、「農薬使用基準」を遵守して使用してください。
- ③この資料は令和元年 7 月 1 日現在の登録状況に基づき作成しています。登録内容は変更される場合があるので、「最新の登録状況」や「農薬のラベル」を必ず確認し使用してください。

「里のほほえみ」で発生しやすい「ダイズ葉焼病」に注意しましょう！

○ 発生生態

葉焼病は、種子伝染するほか、被害茎葉で越冬し、葉から発病します。

はじめは、葉に淡緑～紅褐色の小さな斑点が現れ、次第に拡大して周囲が淡黄色の褐色～黒褐色の不整形の病斑になります。

激しく発病すると、葉全体が焼けたようになり、落葉・枯死に至る場合もあり、減収や小粒化につながります。

